

2025年度 日本質的心理学会論文賞受賞論文および受賞理由

優秀論文賞（伝承の共同構築賞）

竹内一真

「ガラス工芸の復活を通じた世代間の関係性構築の語りーナラティブ・アプローチから捉える新たな制作物の開発過程」22号（2023）, p.332-351.

受賞論文は、ガラス工芸の復活に関して中心的に携わった3名の当事者にライフストーリーインタビューを実施し、一度は途絶えたが復活を果たした技能に関して、ナラティブ・アプローチを通じて新たな制作物の開発に至るまでの過程を捉えたものである。分析によって、継承リテラシーの獲得過程が抽出され、制作物の物語的自己同一性の再構築へと向く様相が描き出されている。学会賞選考委員会では本論文が、世代継承性の課題においてナラティブ・アプローチの特徴が活かされた研究になっていること、すでに先行世代が没しているにもかかわらず、インタビューを通じて不在の他者との内的対話を深め、その対話が新たな意味構築の発動力になっていること、そして「継承リテラシー」という新しい概念を抽出しえたことが評価された。ナラティブ・アプローチは具体物を介することで、語りが進められるという特徴が本研究からよくうかがえ、今後の研究の範の一つとなることが期待される。

優秀論文賞（古典再生・ダイアリー分析賞）

田中元基・大橋靖史

「20年間にわたる日記に表現された生活空間の変容ー認知症の疑われる女性の書いた日記のドキュメント分析」23号（2024）, p.133-154.

家族から認知症を疑われた女性の20年間にわたる日記を丁寧に読み込んでいこうとする著者らの粘り強い姿勢、根気強い分析にまず敬意を表したい。質的心理学研究ならではの論考である。本論文を優秀論文賞として評価した理由を以下に述べる。

まず興味が惹かれたのは、クルト・レヴィンの生活空間概念を援用して、テキストのドキュメント分析から生活空間の変容を読み取ろうとするユニークさである。生活空間を図式化するという手法により、レヴィンの理論を現在に復活したオリジナリティを高く評価した。認知症が進行していく20年の時間の中での変容を、読み手がなぞるように理解できる描かれ方がなされており、新たな人間理解に資する。

次に、日記・ダイアリー研究に新たな分析の筋道を示したという貢献である。日記に記

されている回顧的な言葉を分析していくとき、その場、その日、その時に応じて複数の自己物語が生じることに対する自覚が求められる。この点に著者らは自覚的であろうとし、3つの生活空間の段階変容を分析するプロセスを通して、「現在から過去を振り返ったものは、当時の生活空間と異なるものである」ことも言及している。日記・ダイアリー分析として安易な言語的分析に留まることなく、ライフストーリーとはまた異なる人生の提示の仕方がなされていることに価値がある。

これらを踏まえ、古典理論であるレヴィンの概念が新たなかたちで私たちに提示されるとともに、日記・ダイアリー分析に新たな道標を立てた本論文は古典再生・ダイアリー分析賞に相応しいと判断した。なお、認知症にとらわれずにその人らしさを見るという個別性が十分には伝わってこなかったという指摘や、レヴィンの枠組みに収斂させるのはもったいないという意見も委員からはあった。今後の研究によりこれらの課題を発展的に解消していくことも期待したい。